

鈴木 伸太郎

## 「知る」を見直すことについて

社会生活の分水嶺となる姿勢の変更

### 1 傍観者の誤解

古い話で恐縮だが、ウィリアム・ジェイムズが、19世紀末当時のアメリカの開拓村を馬車で通り過ぎたときに体験したエピソードから話を始めたい。開拓者たちは森を切り開いて耕地を作り、家畜を飼い、家も自分で作ったりしていたわけだが、ジェイムズにとってそれは文明生活からの退化のように感じられたという。つまり、19世紀も末に至った西洋文明が、特にその都会の住民にもたらした生活の水準、街や住居の洗練、一般人でも享受している文化的生活の豊かさなどの様々な良きものを犠牲にして、開拓者たちは、率直に言ってみすばらしい環境に囲まれた汚らしい住居に住みながら、不便でかつ精神的にも貧しい生活を送っているように彼には思われた。もちろん、都会生活ばかりがいいと決めつけることは公平でない。18世紀以来のルソーの「自然に帰れ」というスローガンはすでに人口に

膾炙しており、それ自体としては理解できる。ただ、開拓者たちは森の自然美を破壊した上に、それに代えてなにか素晴らしい人工物を作りだしたりしたわけでもない。自然を破壊した上に、自分たちの文化的水準を上げてまで、開拓者たちがこんな生活をする意味がいったいどこにあるのだろうか、とジェイムズは疑問に感じたのである。

森は、すっかり荒らされていました。森を「改良して」殺してしまったあとの光景は見るも恐ろしく、まるで潰瘍のようなありさまでした。失われた自然をつぐなうべき人の優美さなど、ひとかけらもありません。それどころか、この移住者の生活は醜いものに見えました。(1)

森を「殺して」しまった跡が「潰瘍のよう」に見えるというエコロジストのようなジェイムズの視線は、それ自体に好奇心

をそそられるが、当然彼は自然破壊や環境破壊を批判する現代人とは違う。当時までの文明の産物に対して彼自身は懐疑的ではなく肯定的である。現代人であれば、20世紀を通じて文明が自然を破壊するという問題に直面してしまっているのに、無条件に受けすけに文明を賛美したりはできなくなってしまうているが、すぐ後に見るように、ジェイムズは人間らしい生活というのは基本的には文明生活であるということ疑ってはいないのである。もちろんエピソードの説明の必要性のために若干図式化されたきらいもないが、彼としてはともかくも、積み重ねられてきた人間生活の洗練は、われわれが「生まれながらにして持っている権利なのだ」と感じている。したがって、そういう眼で開拓者の生活を垣間見たときに、洗練された生活を捨てて「原始的」に生活しようと考えるように思えて、そういう生活を送るのは間違っていて、「ごめんだ！」というふうに、彼は強く思ったのである。

むき出しの土地と二本の素手だけで、生きるために闘っていく生活。文化が生んだ最高の成果などひとつも見あたらない生活。こんな生活はごめんだ！何世紀もかけて人類が手にした美しいものや数々の産物は神聖なものだ。それは、われわれが祖先から受けついで遺産であり、生まれながらにして持っている権利なのだ。近代人が、こんな殺風

景な光景のなかで一日でも原始的に生活しようなどと考えるてはいけない——こんなふうに私は思ったのです。<sup>22</sup>

私たちがあがる光景に対して視線を投げかけるとき、体裁を取り繕ったり、なりふりかまったりする余裕はない。一瞬で私たちの日頃の考え方がその視線の中にたち現われてくる。人の生活を瞬間的に汚いとか醜いとか見る場合は特にそうだろう。他人に自分の考えを話すときには、あまりそういう露骨な表現をしないようにしている人も多いだろうが、イヤだな、嫌いだな、と感じるときに、私たちはそのことによつて内心の感じ方を率直に告白してしまっているのである。自分の思考を自分で曖昧化したり、気づかないふりをしたりすることなしには、「私には嫌いな人なんていません」などとは言えるものではない。仮に他人やその生活ぶりなどを嫌うことがなくなるとすれば、それは「嫌わないようにしましょう」「批判的に考えないようにしよう」と密かに決心することからではない。自分の見方や考え方を何らかのきっかけで転換することからもたらされるものである。

いま挙げているジェイムズのエピソードの場合がまさにその例となっている。ジェイムズは、乗っていた馬車の馭者に何気ない問いかけをしたことで、自分の考え方を転換するきっかけをつかむことができた。偶然ながら件の馭者も開拓者たちのひ

とりであり、短い言葉の中で開拓者たちを代弁することができたからである。開拓者たちの代表者である馭者が発する言葉がヒントとなって、ジェイムズは開拓者たちがどのような視線でその光景を眺めているかが想像できるようになった。そして図らずもそれは、彼に重要な洞察をもたらすことになったのである。

そこで私は、馬車を走らせていた山の男にこういきました。「この辺を新しく開墾しなきゃいけないのはどんな人たちのなかね?」「わしらはみんなそうですよ。ここいらの山かげをどれか耕してないと面白くないもんでね」。彼の言葉に私ははっとしました。今まで私は、この状況の内に隠されていた意義をすっかり見落としていたのです。<sup>(3)</sup>

通りすがりの傍観者には汚くて醜いと見えるかもしれないが、実際に開墾する斧を揮っている人は、他人に美しく見せるためにやっているわけではない。やむを得ず生きるためにやっているだけ、というのとも実は違った。山かげの土地を開墾する意思があり、それをやりがいのあることに感じるからこそやっていたのである。意欲を持って開墾しようとする人たちにとって、その土地の光景はどのように見えるのだろうか。作業を順調

に進めるたびに、自らの力を確信するような具合に物事が見えてくるのではないだろうか。美しいかどうか、洗練されているかどうか、文化的伝統にかなっているかどうか、などというのは、そこでは全く場違いな問いかけとなるだろう。

むしろ都会人の生活に欠落しがちなあるものが見出せるのではないだろうか。自分を取り巻く物理的な環境を自分の力で切り開き、変更していくような経験は、すっかり確立してきた都会生活にはまず無縁のものである。例外的に、土木工事・建設工事に携わるような職業人だけが、辛うじて体験できるような特別なことではないだろうか。そこには都会の生活に慣れきった人々には想像しにくい、そして同時に人間の意欲を掻き立てるような現実があったのである。

彼らがすさまじい切り株を眺めるとき、心に感じていたのは己の勝利だったのです。木くずや、樹皮をはいだ木々、丸太を割ってつくった粗末な柵は、せつせと流した汗や辛抱強い労働の、最後の報いを物語るものであり、小屋は自分と妻子の安住の地だったのです。つまり、この開拓地は、私の眼には醜い光景にしかすぎませんでした。開拓者たちにとっては、理想を実現した数々の記憶をよみがえらせるシンボルであり、まさに義務と奮闘と成功を称える賛歌を歌ったものだったのです。<sup>(4)</sup>

風景を眺めるといふ一見罪のない、単純そうにも見える行為であつても、実は勝手に自分の考え方や理想など（つまりは先入観）を投影して、自分なりに解釈する「独断と偏見」に基づく行為以外の何物でもないということがこのエピソードからよく分かる。現代の都会人である私たちにしても、街中を何気なく歩きながら漠然と建物などを眺めては、好きとか嫌いとか、美しいとか醜いとか勝手に決めつけてしまうものだが、言うまでもなくひとつひとつの建物にはそれぞれの事情があり、建てた人や設計した人がそこに込めた理想や願望が込められているはずである。私たちがそれらの事情を知ることが普通はできないがゆえに、散歩する私たちの先入観はそこで固定されてしまふ。

街並みや建物ばかりでなく、人物の見かけの姿や、日頃の行動についても同様のことが言えるはずであるが、私たちは勝手にその意味を自分の先入観から断定してしまつたまま平気で過ごしてしまつている。誰であれ、その人の人生体験を語るような場面に遭遇して、その人が物事をどのように見ているのかを若干想像する手がかりが得られたりすると、私たちの先入観は正される機会を得られることになる。それまでは嫌悪感を覚えていたような人に対しても、話を聞くことで見方が和らぐ可能性がある（もちろん、理屈の上では逆も考えられるわけであるが…）。ともあれ、私たちがたとえヘイトクライムなどという

極端なものとは無関係であつたとしても、だからといつて偏見と先入観を強く抱きながら日常を生活していることに変わりがないという事実を認識することは重要である。もちろん、このことはお互い様であり、私たち自身も、他人の先入観と偏見にさらされ、そのような視線を引き受けながら日常を送っている。改めて考えてみれば、これもなかなか気になる問題ではある。ジェイムズもそのことに言及している。

開拓者たちがその生活状態に対して抱いている独特の理想が、私にはまったく見えませんでした。これはちよつど、私がケンブリッジで部屋に閉じこもつて奇妙な学究生活を送っている姿をもし彼らがのぞいたとしても、きっと私の理想が見えないのと同じことでしょう。<sup>(5)</sup>

ジェイムズが洞察しているように、私たちは互いに傍観者として、場合によっては恐ろしいほどの先入観を抱きあつて生きているのである。中には「美しい誤解」と言えるようなものもあるかもしれないが、だとしても、誤解によつて維持されている他人から見た場合の良き印象というものは相当に危うく脆いものであるし、当然ながら「美しい誤解」などかけらもなしに、容赦なく（私たちに何の相談も確認もなく）他人の心に生じる反感や嫌悪や敵意というものを私たちは無視することなど到底

できない。もちろんそうだからといって、人間は互いのすべてを知ることなどは決してできそうもない存在ではあるが、コミュニケーションに困難を抱える社会に生きている私たちとしては、もう少し、互いの視点や考え方というものに敏感になるように努めながら日常生活を送る必要があるのではないか。

他人をよく知るといふ果てしない課題に直に取り組もうとしても、漠然としすぎて途方に暮れるだけかもしれないが、そのような課題の尖った角を丸めるくらいのことなら少しはできるかもしれない。それをこれから考えてみたいのであるが、私たちの思考習慣とでも言うべきものを認識するだけでも、他人とのコミュニケーションに資するような変化をもたらすことが可能なのではないかと筆者は考える。

先ほど挙げた例に沿って言うなら、当時一流の学者であったジェイムズは思考力も理解力も不足していたとは思われないにも関わらず、思考の筋道が適切でなかったために、先入観から逃れられなかったと言えるのではないか。彼は「むき出しの土地と二本の素手だけで、生きるために闘っていく生活。文化が生んだ最高の成果などひとつも見あたらない生活」というふうな物事を見ていく方向で思考した。言い換えるなら、自分が風景を眺めているという現実から離れる方向に、そして一般化された概念や命題を形成しながら考察するような、理論家的、学者的な方向に思考してしまったのである。すぐ後に柔軟に自分

の誤解を正していく能力を持っていたジェイムズを責めるといふのではないが、とにかく初動の思考は一般論の方向を向いていたということに、いま焦点を当てて考えてみたいのである。

## 2 傍観者の誤解その2

現代の日本社会においても、ジェイムズのエピソードはリアリティーを持っている。元々は九州で地方公務員をしていて、ある時期からは農業に携わりながら著作活動をしている（ペンネームかとも思われるが）宇根豊氏が、ジェイムズの逆の立場とも言えるような体験について次のように書いていることが興味深い。

ある学者が、私が草刈りをしている様子をしばらく見ていて、私に声をかけてきました。「百姓仕事は単純作業の連続ですね。大変でしょう」と。私は驚いて、あつけにとられました。外側から見ればそう見えるのかもしれませんが、しかし、私は草の名前を呼びながら、草と会話しながら、楽しいひとときを過ごしていたのです。<sup>6)</sup>

もちろん、ここでも、誤解をしている（ジェイムズと同様の立ち位置にいる）学者の人を批判するなどは思いもよらない。

第一、事実と反するような観察がなされていたわけでもない。そして、世の中には単純作業で片付けなければならぬ仕事や用事は実に多いし、常識的に見た場合、どちらかというところでは嫌われている作業と言えるだろう。なぜなら、現代社会はそのような作業をAIなどに任せて、人間はもっと人間にしかできないよう、複雑で創意工夫を要するような、そして働く意義を感じられるような仕事をする方がいいのではないかと考えたりにしているからである（また、「自分は単純作業しかできないから」という思考から、AIに仕事を取られるような気がして脅威を感じている人もいる）。そういう背景から言っても、単純作業をしている人の労をねぎらうような言葉をかけるといふのは、まことに良識にかなっている。

ただし、客観的に見れば単純作業をしている人が、自分のしていることが単純な繰り返し（したがって退屈）と思つてやっているかどうかは決して分らない。宇根氏のように「草の名前を呼びながら」作業をするというのは、不合理なことだろうか。都会人で草の名前を知らない人は多いだろうが、そういう人でも家事労働などをしながら、「よかった！助かった！」とか「こいつめ！」とか、声に出さずとも独り言を繰り返すことはよくあるだろう。毎日使っている道具に渾名を付けている人もたくさんいるだろう。農作業の場合も、素人にはひとしなみに雑草と見えるものについても、ひとつとひとつの名前がある

ことは明らかであり、それをよく知っている人が草の名前を呼びながら作業していても、何ら不思議なことではない。

生物・無生物を問わず、私たちは身近な存在と感ずるもの名前を付けて、それを呼びながら関わりを続けるような習性がある。それは他の人間との会話と地続きになっている営みである。家族や親しい友人たち、そしてさらに言うなら、職場の同僚たちと私たちの日常会話を「客観的」に記述した場合、それが「単純作業」に見えないとも限らないのではないか。大雑把に言つてしまえば、平穏な日常の中にあつては、毎日同じようなセリフを交わしながら、私たちは生きていくものである。毎朝「おはよう」と挨拶することは機械的な単純作業かもしれないが、挨拶する相手がよほど苦手な人物でない限り、私たちは飽きることなく毎朝「おはよう」と挨拶し合うであろう。

それが「会話」であれば、それを「客観的」に行動分析するようなことは、特別な専門家でない限り、たとえ「学者」であつてもあまり私たちはしないものである。つまり、私たちは会話を「外から」見るということは少ない。言葉は意味を持っていて、それがはつきりと表明され、そのようなやりとりが何度か交わされていくという事態の中で、私たちは自然に会話という現象を意味のある言葉のやり取りとして「内から」眺めるようになる。しかし、会話にならない独り言や、内心の言葉は、他人には見えないし聞こえないので、黙々と作業をしている人

を見た場合、他人はそれを自然に「外から」見るようになるわけであろう。例にある学者の人がその人の「草との会話」を、「単純作業」と捉えてしまうというようなことが、そこから当然に起こってくる。

これ「草の名前を呼びながら、草と会話しながら過ごしていたということ」は、私の内からのまなざしです。外からのまなざしはすぐに言葉にできません。ところが内からのまなざしは、人に語ることはあまりありません。私たちは物事を外から客観的に見るよりも、内からのまなざしで見たり感じたりする方が多いものです。とくに百姓仕事はそうです。(「」は引用者による。)

振り返ってみると、ジェイムズの誤解も、開拓者たちの「内からのまなざし」を念頭に置かなかつた(想像してみることもなかつた)ところから起こっていたと言える。たとえ開拓者たちが黙々と斧を振るっている状況を目の当たりにしていたとしても、「外から」見ている限り、森の木を切り倒し、家を建てたりしていた人たちの「内からのまなざし」には到達できない。到達するためには基本的な態度変更が必要になるのである。もちろん厳密に言えばそれは本人たちに直接聞いてみないと分からないとしても、少なくとも私たちは「内からのまなざし」を

想像しようと試みることで、私たちの先入観と、他人の「内からのまなざし」との間のギャップを少しでも埋めることができるようになるのではないだろうか。

そればかりではない。「内からのまなざし」を獲得することが、ある仕事や作業を、意義あるものと感じるための鍵ともなる。他人が何かをやっている姿を見ているだけでは、仕事や作業の必要性は「外から」「客観的」に理解できるだけで、その仕事や作業をよく理解できるようにはならない。それこそ、草刈りという作業は、農作業にはなくてはならないものだということ、誰にでも「客観的」に了解できる。だが、それを「外から」見ているだけでは「単純作業の連続」としか見えないだろう。宇根氏自身も、かつては自分もそうだった、と告白しているのである。

若い頃は田んぼの畦草の名前なんてあまり知りませんでした。その頃の私の畦草刈りの気分は、「ああ暑い。早く刈ってしまおう」というようなものでした。(8)

農業ばかりでなく、例えば小売業のアルバイトに携わる大学生でも、同様の感情を持つのではないだろうか。店の棚に商品を並べたり補充したりするような作業の連続は、それを「単純作業」と見るのみであれば、たとえ肉体的な負担としては大き

くなくとも、その単純さのゆえに、大きな負担と感じられてくるものである。

その状態から抜け出す道は、作業を「内からのまなざし」で見るとのことなのである。ここに労働の秘密があると言っても過言ではない。これについてはすぐ後で述べたいと思うが、とりあえず宇根氏の話を聞いてみよう。前述のように、宇根氏は、草との会話をすると「内からのまなざし」を獲得することによって、畝の草刈りという作業に意義を見出し、楽しく作業をすることができるようになった。

やがて、草の名前を覚え始めたら、草がよく見えるようになってきたのです。「まだ秋なのにもう春の草のあざみが咲いているな」「蔓簿（ツルボ）は一年に三月と九月に二回も葉が出る変な草だ」「田んぼの入り口から、なかなか中の方に入って来られないのが小待宵草（コマツヨイゲサ）だ」というようなつきあいができてくるのです。<sup>9)</sup>

草刈りの作業をする人間の周囲にあるのは、よくよく見ればただの草ではなく、（同類があちらこちらにたくさんいるとはいえ）ひとつひとつが種類の異なる、そして性質のことなる、季節によって別々の挙動をとる、個性的な存在たちなのである。それらとの関わりは、いつしか他の人間を相手にすることに類

するような、「会話」として意識されるようになっていく。それはすなわち、草刈りの作業を「内から」眺める眼差しを獲得したということなのである。意味を見出すと言いつ換えてもいいだろう。私たちが単純作業に苦しむのは、「意味」を見失ってしまうからなのである。それは、よく知られたビクトール・フランクルの体験したナチの収容所でも変わらない。「意味」を見失って苦しむことに対する解毒剤は、「意味」を再び見出すことである。宇根氏も、草の名前を覚えだして、個性を認識しだしてから、「意味」が見出だせるようになっていった。

こうなると「草の名前を覚え始めたら」草刈りしても、草たちと話をするようになるのです。「もう花が咲いたのか。早過ぎはしないか」「今度はあまり伸びていないから、君たちは刈らないよ」「今年もやっぱり会えたね」と、口には出しませんが、心の中で会話しながら、草刈りをするようになります。こうなると草刈りが苦にならなくなったのです。草刈りという仕事に没頭できるようになったのです。草刈りが楽しくなったのです。草刈りによって、自然の中に入っていけるようになったのです。<sup>10)</sup>

「自然の中に入っていく」ことは、すなわち自然を「外からのまなざし」で見見るのではなく、「内からのまなざし」の中に



取り込んでいくことである。具体的には草の名前を覚え、ひとつひとつの個性を認識していくこと、そして自分と同等の存在であるかのように話しかけたりするなどという関わりを持つようになるということである。人間同士の会話と同じように、そこに人は「意味」を感じるようになっていく。

作業の「意味」は、「外からのまなざし」からは生じてこない。早く終えてしまいたいような「単純作業の連続」を救うものは、「内からのまなざし」の獲得なのである。現実には、ただ作業をしていても、「内からのまなざし」がすぐに獲得できるということではないだろう。自ら作業をしながらも、常に「外からのまなざし」でそれを眺めるような態度を取ること、人間には可能なのである。そのような態度を取り続ける限り、作業は「意味」を感じられない、「単純」な、そして精神的に辛い労苦となる他はないだろう。

「意味」とは、ポジティブな、積極的なものばかりではない。それは確かである。したがって「意味」を感じるようになったからといって、辛くなくなるとは言い切れない。嫌いな人間と一緒に働くのは辛いし、様々なプレッシャーの中で働くことも辛い。それくらいならば、いつそのこと「意味」は捨象して、ひたすら「単純作業」または「意味」の薄い無味乾燥な作業に勤しんだほうがましだという考え方もあり得る。

ただ言えることは、「意味」があると感じられる事柄について

ては、意味の読み替えの可能性が常にある（現実の「意味」の解釈の可能性は、少なくとも人の数だけある）ということである。「意味」が感じられないということは、現実に対する関心が失われるということである。物理的な壁に直面している場合のように、それ以上の可能性の追求ができないということである。絶体絶命という意味ではなく、少しでも状況打開の可能性が開けるとしたらそこから「意味」を読み取る方向性しかないということである。比喩的に言えば、壁に直面したとしても、それだけであれば現実に関心を失ってしまうだけであろう。そこにチョークで絵を描くだけで、壁という現実に対して関心を喚起する力が、ある程度蘇ってくる。

### 3 仕事の「意味」を見出す「内からのまなざし」

農作業の草刈りが「単純作業」とは限らないように、小売業に必要な様々な仕事も「単純作業」とは限らない、と強く主張するのは、ユニクロや成城石井の経営で成果を上げてきた大久保恒夫氏である。

「小売業ほど面白い仕事はない」…（中略）…この言葉は、一九七九年にイトーヨーカ堂に入社して以来四半世紀にわたって、私が確信してきた信念です。けれども、「小売業

の仕事は辛くて単調で、喜びが少ない」と感じている人が意外に多いようです。<sup>(11)</sup>

ここで大久保氏も、草刈りにおいて見られたのと同様の「外からのまなざし」に基づく誤解を感じとっている。すぐ後で見られるように、大久保氏にとつて、「小売業の経営改革」というのは、できるだけ多くの関係者、従業員に「内からのまなざし」を獲得してもらおうということを意味している。先程見たように、田の畦で草刈りの作業をしている農業従事者は、当面人間を相手にしていない。しかしながら、それにもかかわらず、「草の名前を覚え、草と会話する」という「内からのまなざし」が可能になる。小売業は農業とは違う。小売業の相手は人間に決まっている。本来から言えば、「草と会話する」よりも人間と会話する方が簡単そうである。人間と会話するようにすれば、先に論じたように、人は自然と「内からのまなざし」を獲得できるようになると思われる。にも関わらず、大久保氏が感じているところによれば、小売業においても「内からのまなざし」が獲得できない人が多いという現実がある。

つまり、大久保氏の書いているように「小売業の仕事は辛くて単調で、喜びが少ない」と感じる人が多いということは、畦草取りで「ああ暑い。早く刈ってしまおう」と感じていた（草と会話できていなかった）宇根氏の若い頃の意識に対応する現

実を表わしていると考えられるのである。草と会話できない人、農作業に「内からのまなざし」が持てない人と同様の意識が小売業にも広がっていることを予想させる。小売業の作業の対象は、草ではなく人間であり、「お客」である。そして実際、お客と日常気軽にコミュニケーションをとっている人は、間違いなく「小売業の仕事は辛くて単調で…」などとは感じていないだろう。大久保氏の見解によれば、そのようにお客と直接会話するところまでいかなくとも、その手前で、（不特定多数の）お客の考えることに十分関心を払えればそれですでに十分である。店で作業をして成し遂げた結果を被るのは店に来るお客であり、自分の仕事がどのような影響をお客に与えるかということに関心が向かえば、作業に「意味」が感じられてくるはずである。小売業の仕事が単調だと感じている人は、そのような「意味」から切り離されてしまっているのである。

お客様が何を求め、何に不満を感じているかへの関心が低すぎるのです。本部からの指示への対応や、納品される商品の補充作業に追われて、お客様に目を向けるどころではありません。作業に没頭するあまり、お客様が売場についても気がつかなくなったり、ひどい場合には、お客様が邪魔だとさえ感じたりしてしまいます。何のために作業をしているのかという、基本が理解できていないのです。<sup>(12)</sup>

宇根氏の書いていることと合わせて考えてみれば、大久保氏は、単に、職場の上司として従業員を叱咤しているのではなく、ましてや経営者として「お客様第一」のモラルを従業員に押し付けようとしているのでもないことが分かるだろう。仕事とは何か、職業とは何か、という問題の根幹を指摘しているのである。小売業の仕事は、顧客に向けられたものである。顧客とは、すなわち小売業に携わる人間であつても立場を変えれば自分もそうなるであろうような立場の人たちということであり、誰がそうであつてもおかしくないような、社会に生きる一個の人間なのである。お客に喜ばれるような仕事をするというのは、そういう意味で、特定の商人道徳の問題などではない。誰かある一個の人間にとつて本当に役に立つことを自分がしてあげることによつて、その人に喜ばれるようにできるかどうかの問題である。そして、誰かに喜ばれるということが、仕事をした自分に「意味」のあるものとして返ってくるかどうか、そのような事態を「内からのまなざし」で理解できるようになるかどうかの問題である。

小売業の作業工程を「外から」眺めている限り、その作業工程をこなすのが自分のすべきことであるという考え方しかできず、たとえ店に来たお客であれ、それを妨害されれば自分の仕事を妨げる不快な要因と感じてしまうという意識から逃れることは難しい。だからこそ、お客の存在に気づかなかつたり、

「邪魔だとさえ感じたり」してしまうことにもなる。

売り場にいるお客が何を求め、何を考えているかということに関心を向けられないということは、繰り返しになるが、草刈りで言えば、草の名前を覚えられないということに相当するようなものだろう。もの言わぬ草に対して話しかけるのは、名前を覚えて、親しみを感じ、その草の様子に関心を持つからである。店に来るお客も、従業員に話しかけるとは限らず、黙々と商品を物色して買っていくだけかもしれないが、そういうお客の様子に関心を持ち、できれば役に立ちたいと感じることで、自らの内心に会話が生じてくる。思惑通り喜んでもらえたか、どこか不満そうな顔をされたか、ということに関心を持ち始めるなら、喜んでもらえるように努めることも、自然な行為となっていくことだろう。

大久保氏の場合は、イトーヨーカ堂に勤めていた若い時代に、近所でスリッパが売れているのに目をつけ、自分のところの店の売り場に大量に仕入れたスリッパを置いたところ、飛ぶように売れたこと、そしてそれが強い喜びにつながったということが原体験となつたと語っている。

自分一人で考えて、こうすれば売れるのではないかと  
思つて、自分で実行して売つてみたら、お客様が反応して  
くださったのです。そうなると、お客様が寄つてきた時に

はいくらでも声が出ました。「いらつしやいませ！」とか、買って下さった時にはものすごく笑顔が出て、「ありがとうございました！」と、いくらでも、心から言えます。

「商売はこれではなくちやダメだな」と思いました。スリッパ売場があつて、本部からの品揃えの台帳が送られてきて、商品が送り込まれて、並べて置いて、それをお客様がセルフで勝手に買っていかれるだけですと、売れても感動はありません。それに対して、自分で考えてやってみて、売れた時の感動は一生忘れないのです。それと同時に、データが無性に見たくなるということもわかりました。ふだんは見ると言われてもろくに見ないデータが、自分で商売し出すと時々刻々に見たくなります。<sup>13</sup>

勝手に一人で行動してよいのか、というような職場の規則に関わる部分はともかくとして、お客に関心を持つということが主体的な行動につながり、ひいては仕事の喜びにつながっていく様子がよく分かる。これも「外からのまなざし」で見えてしまえば、うつかりすると「利益が上がった」からよかった、という読み取り方に還元されてしまいそうである。しかし、それが間違いないにしろ、仕事の「意味」に関わる「内からのまなざし」では、利益が上がることもさることながら、自らがお客様の考えていることを的確に掴み、お客に喜ばれる仕事ができ

たことの方がより重要であろう。「内からのまなざし」がなければ、お客の考えていることを想像するということもなくなってしまう。私たちが他の人と関わるといことは、常に的確とは限らないにしても、他の人の思考や感情を読み取ったり想像したりするということが動機になっている。すべての仕事で他人を直接相手にするものというわけではないが、小売業に典型的に見られるような、他人を相手にする仕事を内発的に動機づけるものは、「内からのまなざし」が基本になって生じてくると言えるだろう。

自称「働き方研究家」の西村佳哲氏が、著書で、リクルート社のワークデザイン研究所の冊子を紹介する形で書いているものであるが、「大手企業の経理事務、ロτζジの手伝い、プログラマー、営業と様々な職種を経験してきたが、もつとも生き生きと楽しく仕事が出来たのはスーパーのレジ打ちだった、と語る」女性の事例も、ここで考え合わせると興味深い。<sup>14</sup>

この女性は、「最初のうちは仕事が単調に感じられ、短大まで出た私がなぜレジなのかと不満に思っていた」、ということであるので、畦草刈りの例や大久保氏の書いていることとまったく同様である。最初のうちは「外から」しか仕事を眺められなかった。しかしこの女性は、仕事をしながらレジでいつも見かけるお客さんに声をかけたり、お年寄りなら持ちやすいように袋を2つに分けてあげたり、などお客との関わりを経験して

いく。それにつれて、次第に地域の人とのコミュニケーションを深めていくことになったようである。そして、「ある日、隣のレジが空いているのに自分のレジにお客さんの列が出来ていることに気づき、深い感慨に包まれた」という。

ここには、自分自身の発見や工夫が、手応えとなつて戻ってくることの喜び、自分が認められ、かけがえのない存在として受け入れられることの喜びがある。「意味」は自分が行った行為に対するフィードバックによって生成される。<sup>15)</sup>

先にも述べたように、作業を「外側から」眺めている限り、「意味」には到達できない。到達できたとしても、せいぜい、金銭的報酬と引き換えに自分の労力を差し出すくらいの「意味」であり、それでは「作業の意味」「仕事の意味」とは本当は言いにくい。なぜなら、「その作業」「その仕事」でなくとも、労力と引き換えに報酬を受け取るという構造は同じだからである。他の作業、他の仕事でも同じ意味しか読み取れないとしたら、具体的な「この作業」にはほとんど意味が感じられていないと言わざるを得ないだろう。具体的な作業に「意味」を感じられるとしたら、まずそれが「内からのまなざし」で捉えられていなければならない。そこから「自分自身の発見や工夫」が

生じてくる可能性が生まれる。そして、発見や工夫に基づく行動によって、それに対する反響が生じてくる。まさに、「自分が行った行為に対するフィードバック」であり、日常的な言い方では「手応え」といつていいようなものである。

「内からのまなざし」から現実に対して働きかける動機が生じ、その結果として現実からの手応えが返ってくる。そのことによつて私たちは現実本来に「関わる」とも言えるし、「巻き込まれる」とも言える。そこではたとえ草のような存在であれ、お客であれ、自分と同等の存在とみなすような存在との間の関係が生じている。現実との深い関わりの中でこそ、私たちの生活は充実するきっかけを掴むことができる。

#### 4 知識というものの捉え方の問題

別の角度から言い換えてみると、仕事や作業のような場で他人の世界を想像するような「内からのまなざし」というものを獲得するということは、そこに自分ひとりの世界を相対化する、あるいは拡張するという契機をはらんでいる。「外からのまなざし」によつては、せいぜい、社会常識の範囲でしか私たちの現実世界の意味は広がらない。他人から否定される可能性も低いかもしれないが、他人の理解している現実との間の相互交渉を通じて自分を相対化していく契機を獲得することは困難であ

る。

今述べたような相互交渉につながるような「内からのまなざし」が私たちのコミュニケーションを積極的に動機づけると言えるだけでなく、私たちの既成の世界が揺さぶられ、変容にさらされ、それを通じて現実の「意味」を私たちにより強くもたらしす契機ともなっている。つまり、逆に言えば、「内からのまなざし」を欠くということは、現実の「意味」の喪失をもたらしかねない危険を含んでいるということになるのではないか。

現代社会においてコミュニケーションが重要なのは、私的領域における、家族や友人・知り合いとの間の日常会話の部分というより（もちろん日常会話にすら乏しいような孤立した個人にとっては、事態はなおさら深刻ではあるが）、仕事のような、あるいは政治的生活におけるような、公共的な領域における「内からのまなざし」を確保するという部分においてである。

「内からのまなざし」は出発点である。他の人間の理解する現実に対して開かれた態度を取るということは、まずは「内からのまなざし」で（他の人の意味の世界と地続きな）自らの意味の世界に関心を払う必要がある。それによつて私たちはコミュニケーションのきつかけをつかむことができる。仕事なら「自分が行った行為に対するフィードバック」こそが大事な「意味」の契機なのである。

現代社会においてその契機がある種の危機にさらされている

と言えるのではないか。というのは、「外からのまなざし」の優勢な状況が見られるからである。ここで詳述はできないが、例えば前述の宇根氏の著書の論旨は、「自然」の捉え方として「外からのまなざし」を暗黙の前提として語ってしまうことが、私たちが自然の中に入っていくことを困難にしているということにある。それは私たちが自然の中に「意味」を見出すことを困難にしており、「自然環境の保護」を空虚な言説にしかねない危機をはらむ。そしてまた、「内からのまなざし」によつて自然の中に易易と入っていつていた私たちの祖先たちの伝統も、「外から」自然を見ることに慣れてしまった私たちは見失ってしまういかねない。

自然科学は客観的な「外からのまなざし」に基づいて打ち立てられた体系であり、それを唯一の知識の源泉と考えてしまうと、今述べたような錯誤に陥ってしまう。自然科学でなくとも、学問的な体系が、「外からのまなざし」の産物である客観性や実証性に傾いた結果として、現代人は知識を身につけるほど社会生活上で「意味」を見失う危険に晒されている。

専門家と一般人の関係において、専門家が不当に優位に立っているという指摘は、すでに言い古された感がある。パターンリズムの問題として、あるいは医療におけるインフォームドコンセントの問題としても、すでに多くの批判がある。ただ、本稿で述べてきた視点から言うと、そもそも専門家の拠り所と

なっている知識の土台が客観性や実証性の上にあるということこそが、より本質的な問題である。

専門分野の「客観的な」知識こそ価値があり、誰もが日々自らのような体験をしつつあるのかというような「内からのまなざし」にはあまり十分な注意が払われていないと思われる。専門家が一般人に「教える」という姿勢が正当化できるのは、専門家の方がたくさん知っているということが前提となる。しかし、「内からのまなざし」の特徴は、人の数だけの現実があるということなのであり、専門家がより多くを知っているというふうに決めつけてかかることはできない。

専門家が知識を持っているという意識は、「内からのまなざし」を閉ざして、物事を「外から」、専門知識の側から眺めるということにつながる。例えばパウル・ファイヤーベントが知識人の思い上がりを批判する文章を見よう。知識をもち、思考力があるとされる人間は他の人間を教え導く存在なのかということを彼は問題にしている。

まず人々は考えることを教えられなければならない、という反論は、そう書く者たちの思い上がりと無知を反映しているにすぎない。というのも、基本的な問題は次のようなものだからである。語ることができるのは誰で、沈黙したままであるべきなのは誰なのか。知識を有しているのは

誰で、単に強情なのは誰なのか。<sup>16</sup>

専門家や「知識人」などが、一般人よりも多くを知っているという前提であれば、講壇から知識を教え、一般人はそこから知識を得るという形が自然である。つまり語るのは知識のある人たち、教育のある人たち、専門家等々であり、沈黙しながら話を拝聴するのが一般人ということになる。「学識経験者」というような言葉もあるくらいで、学識のある人間は、自ら考える方法を身につけているが、そうでない人間は、まず（学問的見地から、専門的見地から）物事をどのように考えねばならないかが分からない、と現代風な社会常識では暗黙のうちに前提されてしまっている。

しかし、「内からのまなざし」の観点からは、そうではない。人の数だけ現実があり、お互いがあることをよく知らないという前提に立てば、どちらかというと、客観性に基づいた知識を蓄えた人間の方こそ、一般人のそれぞれの話を聴くようにしなければならぬ。なぜなら、知っていることに自信があり、自己主張をしがちなのは知識があると思っている人間だからである。あるいは、反論されると知識を頼りに「強情」になりがちなのも、知識人や専門家だからである。

ことさら価値を転倒させるのが本稿の趣旨ではない。現在主流の学問的知識や技術的知識が客観性を拠り所に行っていること

に異を唱える必要はない。他の人よりも広く深い学識を持つ意味が失われたわけでもないだろう。ただ、「内からのまなざし」が視界から消え去ってしまうと、知識の流れが一方通行に近くなっていくということは間違いなく、それは知識のためにもならないのではないか。客観性のみが価値があるのではなく、私たちが現実を「内からのまなざし」から眺めること、そのことを認識することにも、やはり同様に非常に大きな価値があるということなのである。後者の価値は、人間同士のコミュニケーションにつながる道であり、「フイールドバック」によって「意味」が生じる道であり、他者の「内からのまなざし」によって、誰もが現実の新しい見方に目を開く道であり、柔軟な精神が維持される道である。

我々の専門家、物理学者、哲学者、治療者、教育者は信賴できるのか、彼らは自分が何について語っているのかを知っているのか、それとも自分自身の惨めな存在を複製しただけではないのか。プラトン、ルター、ルソー、マルクスといった偉大な精神は何か与えるものを持っているのか、それとも我々が彼らに感じる崇拜の念はわれわれ自身の未熟さの反映に過ぎないのか。<sup>17</sup>

知識があると思っている人たちは、過去の「偉大な精神」の

方ばかりを向きがちである（例には挙げがっていないが、自然科学の分野の「偉大な精神」を挙げても趣旨は変わらない）。自分よりも彼らのような偉大な精神の方が多くを知っているから、かもしれないが、単なる権威に対する服従に過ぎないかもしれない。リトマス試験紙になるのは、「偉大な精神」の方ばかりを向いているのか、それとも、多数の他の人たちの方も向いているのかという点である。「内からのまなざし」を問題にする限り、「偉大」かどうかばかりが基準ということではなく、誰もが他の人の知らないことを知っている可能性がある、ということが重要になる。大抵の人よりも多くを知っている人が（どこかに、そして遠い過去にも）存在しても不思議ではない。ただし、その人があらゆる点で他の人よりも多くを知っているということではない。

客観性に代表される「外からのまなざし」は、確実な知識の増大に貢献してきた。多様で多数の人々の主観的なものの見方は、切り捨てられてきた。なぜそういうことになるかと言えば、知識は客観的に合理的に議論された結果生まれた理論によって基礎付けられたものであり、「外からのまなざし」こそが重要で決定的である、という観念が行き渡っているからであろう。つまり「内からのまなざし」は、不完全で主観的な見解（普遍性の乏しい見解）にしか行き着かない、というような観念である。



ただし、客観性というものは、現実の中から、誰もが認める、認めざるを得ないことを取り出してくることによって得られるものであり、それは、最大公約数の性格を持つ。このことから、客観性を問題にしていく過程は、現実の「意味」を捨象し切り詰めていく道でもある。私たちが生きていくということが、現実の限らない魅力に惹き寄せられるということであるとすると、客観性の追求というものは、私たちひとりひとりにとつての現実の「意味」を捨象し、うっかりすると「価値のないもの」とみなしてしまいがちになる。しかし、私たちは（ジェイムズの見た開拓者たちがそうであったように）個々の現実の「意味」を捉えなければ、生きることができない存在なのである。客観性ばかりを重視するのは、社会生活上において現実の「意味」を喪失させてしまう危険をはらんでいるのである。

これらの問いはわれわれ全員に関わっており、我々はみなその解決に参加しなければならぬ。一番開けな学生も最も抜け目ない農夫も、誉れ高い公僕も長年耐え忍んできたその妻も、学者も野犬捕獲人も、人殺しも聖人も、彼らはみな次のように言う権利を持っている。こちらを見てください。私もまた人間なのです。私もまた考えや夢や感覚や欲望を持ち、神の似姿に創られているのです。けれど、お話の中であなたは私の世界に決して注意を払いはしませ

んでした。：（中略）：抽象的問題の重要性、与えられた解答の内容、それらの解答に描き出された生活の質、これらすべてが決定されるのは、誰もが議論に参加し、その問題に関する自分の意見を述べるように促された場合だけである。(18)

具体的な社会問題や政治問題の平面で論じることは本稿の目的ではない。しかし、「一番開けな学生も最も抜け目ない農夫も、誉れ高い公僕も長年耐え忍んできたその妻も：」その人独自の「内からのまなざし」から現実を眺めているという事実  
に注意を払うかどうかは、現代社会の核心的な問題であるという  
ことは言えるのではないか。これを「知識」と考えてしまうと、議論は果てしなく混乱していつてしまうと思われる。単純に、人の数だけ現実の見方があるということであれば、すべての人にとつての現実を知ることが、まず不可能だということにならざるを得ない。「知る」ということも、現代の社会によつて、特殊な意味に限定されてしまっているのではないだろうか。

だからこそ、「知識」につながるような具合に「知る」と言うよりも、「知りたいと思う」あるいは「関心を払う」ということの方に重要性があると言えるだろう。草の名前を「知る」というよりも、多数の草の個性的な存在を「知りたいと思う」

こと、個々の草に「関心を払うこと」が「草の名前を知る」といつながり、草と「会話すること」につながる。店のお客の考えていることを「知る」というよりも、お客の考えていることを「知りたいと思う」ことが、お客の満足を追求するようなモチベーションにつながっていく。関心が持てなければ、「会話」も「工夫」も生まれず、「意味」も生まれない。農業や小売業といった職業労働にモチベーションをもたらし、個人個人にとって少しでも有意義なものにしていくという課題ばかりでなく、広く社会生活も政治生活も含めて、社会に生きる個々の人間の眺める現実「関心を払う」ことが、問題解決を考えるための動機づけにとっても、解決のプロセスにとっても重要となるはずである。そのような意味で、誰もが「考えや夢や感覚や欲望を持ち神の似姿に創られている」ことに関心を払い、知ろうとすることが重要なのである。それが直接知識につながるという意味ではない。しかしながら、それが知識の文脈や意義そのものを変容させることに繋がる可能性がある。これは決して小さいことではない。あるいは、そこからさらに、新しい発想やアイデアが生まれてくることに繋がり、新しい方法論や発見に繋がる可能性もある。

客観的な知識のみを重要と考えているのでは、知識すら活用できず、新しい展開や創造性の発揮も弱くなってしまふ。農作業をやる意欲や、小売業をやる意欲などが、減退していくのと

同様に、そもそも、教育の現場において、知識を学ぶ意欲すらも減退してしまうのではないだろうか。「知る」ことについての姿勢が「内からのまなざし」を十分に視野に入れたものになるかどうか、社会生活全般の分水嶺であり、今後の社会の中心的テーマの1つとなっていくと言えるように思う。

## 注

(1) スティーヴン・C・ロウ『ウィリアム・ジェイムズ入門』日本教文社 1988年 55ページ。ジェイムズの論文「人間におけるある種の盲目について」の訳文として、この文献に採録されているものをここで使った。

(2) 前掲書 56ページ。

(3) 前掲書 56ページ。

(4) 前掲書 56―57ページ。

(5) 前掲書 57ページ。

(6) 宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』筑摩書房 2019年 9ページ。

(7) 前掲書 9ページ。

(8) 前掲書 59ページ。

(9) 前掲書 59―60ページ。

(10) 前掲書 60ページ。

- (11) 大久保恒夫『また一步、お客さまのニーズに近づく』  
かんき出版 2005年 59ページ。
- (12) 前掲書 59ー60ページ。
- (13) 前掲書 65ー66ページ。
- (14) 西村佳哲『自分の仕事をつくる』筑摩書房 2009年  
261ー262ページ。
- (15) 前掲書 262ページ。
- (16) パウル・ファイヤーアーベント『理性よ、さらば』法政大  
学出版局 1992年 378ページ。
- (17) 前掲書 378ページ。
- (18) 前掲書 379ページ。